

## 『言継卿記』・『信長公記』から見た京都の城

馬瀬 智光

(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課)

### はじめに

歴史考古学において、文献史料と考古資料の照合、検証は欠かすことのできないものである。特に都市部では後世の改変が著しいことや、小規模な発掘調査が多いことから、一つの調査成果では「点」としての把握にとどまり、「面」的な把握を困難にしている。これを解決する手段として試掘調査や詳細分布調査（立会調査）といったこれまで余り利用されることの無かった調査成果が有効であることを検証してきた[馬瀬 2014]。これらに加えて、発掘調査等で検出された遺構の性格を探る上で、文献史料は有益な情報を与えてくれる。文献史料を利用することにより、破却、移築、後世の攪乱等で失われた建物等の施設に関する情報や、築城や破城に至る経過、築上主体の情報[馬瀬 2004]に加え、当時の人々の城郭に対する思いなど、考古資料から得ることの困難な情報を得ることも可能である。

一方で、調査で検出される遺構の全てが文献史料で明らかにできるわけでもない。

今回、公家の日記である『言継卿記』と、軍記である『信長公記』を題材に、文献史料の記述と考古資料との比較検証を行う。

そしてこの検証作業を通じて、文献史料の有効な利用法を探るとともに、考古資料の分類・整理がいかに重要であるかも明らかにしたい。

### 1. 二つの文献史料

戦国時代の公家山科言継の日記である『言継卿記』は大永7年(1527)から天正4年(1576)までの約50年にわたって記されたものである。また、織田信長の家臣であった太田牛一が織田信長の事跡をまとめた『信長公記』は信長幼少期から天正10年(1582)にわたって記されたものである。両者とも戦国期の京とその近郊にあった城郭が詳しく記されており、発掘調査や現地踏査などにより明らかになっている遺跡と

の比較検討を行う。

さらに、これらの記述から、城郭のもつ意味の変化も探っていきたい。

### 2. 両文献に現れる京近郊の城郭(図1)

両文献とも畿内にとどまらず、近江(現滋賀県)、関東・東海地域、四国、中国地域の城郭も記述されている。主な城郭は下記のとおりとなる。3章以下では、下記の城郭のうち、足利義晴・義輝の築いた中尾城跡、日蓮宗最大の寺院であった本國寺城跡、織田信長が足利義昭のために築上した旧二条城跡の3カ所を検証する。

#### ●旧二条城跡(武家御所・公方様御構え)

・・・足利義輝, 足利義昭

#### ●二条殿御池城跡(二条殿, 二条殿御構え・二条新御所)

・・・織田信長, 誠仁親王

#### ●北白川城跡(北白川城, 勝軍城, 勝軍御城, 東山勝軍地蔵之山, 勝軍山, 白川之古城)

・・・三好勢, 足利義輝

#### ●中尾城跡(東山武家之御城, 東山武家御城, 東山御城, 御城)

・・・足利義晴, 義輝

#### ●如意ヶ嶽城跡(如意之嵩之城, 如意寺之嵩)

・・・三好勢力

#### ●本能寺城跡(本能寺, 三條西洞院本能寺)

・・・織田信長, 足利義昭

#### ●靈山城跡(東山靈山, 東山靈山御城, 靈山, 靈山御城)

・・・平松時宗, 足利義輝

#### ●東寺旧境内(東寺松永陣所, 東寺)

・・・教王護国寺, 松永久秀

#### ●勝龍寺城跡(勝隆寺, 西岡勝隆寺, 勝龍寺, 勝隆寺之城, 西岡勝隆寺之城)

・・・石成主税助友通, 武家(将軍)

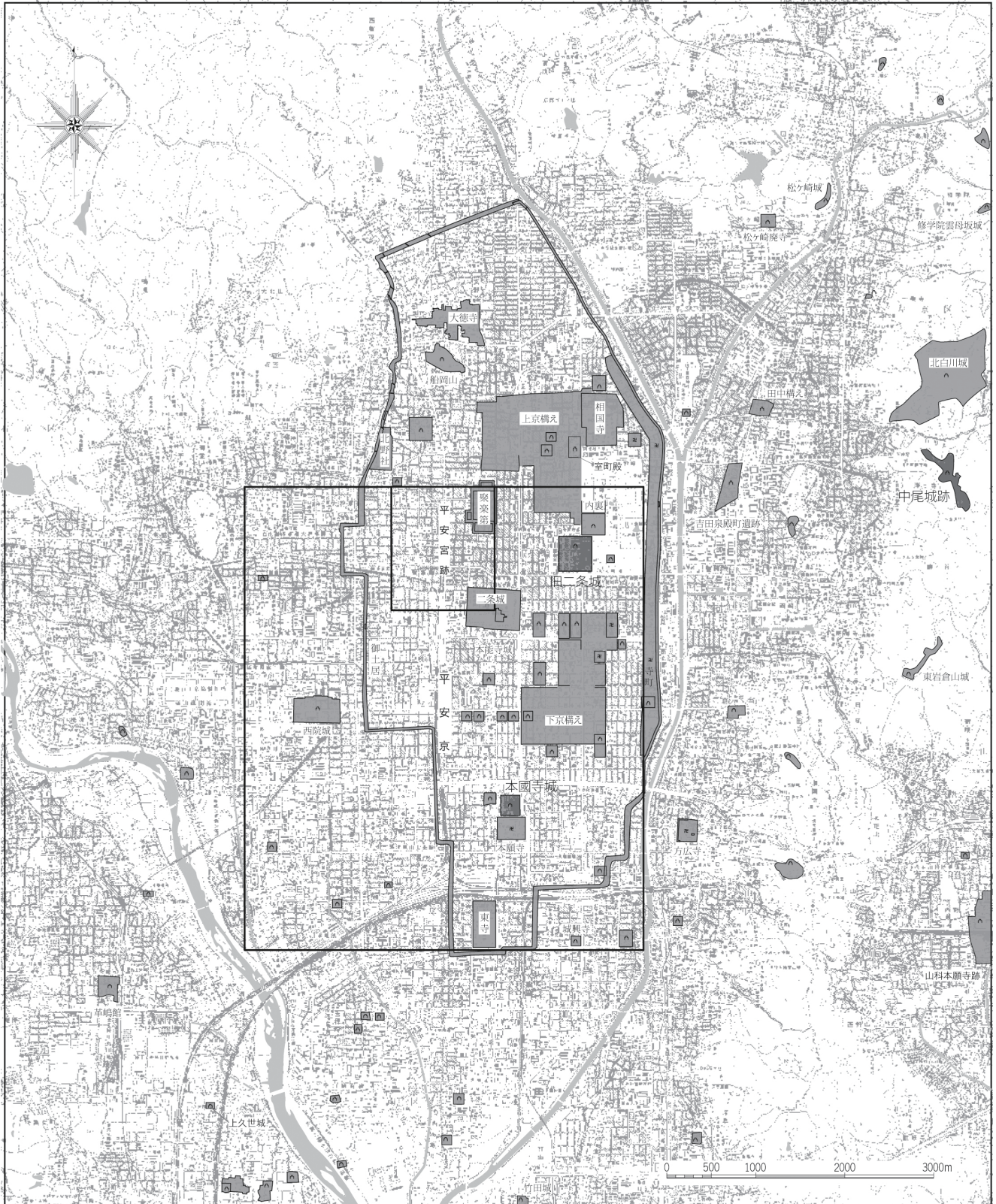


図1 市内中心部城郭分布図修正

- 本國寺城跡（六条本國寺，本國寺）
  - ・・・日蓮宗徒、足利義昭
- 妙覚寺城跡（妙覚寺）
  - ・・・織田信長、日蓮宗徒
- 吉祥院政所城跡 or 吉祥院西ノ内城跡 or 吉祥院竹尻城跡（吉祥院三好所，三好所，吉祥院）
  - ・・・三好長慶
- 槇島城跡（眞木島之城，宇治眞木島）
  - ・・・上野玄蕃頭，足利義昭
- 西院城跡（西院小泉城，西院）
  - ・・・小泉氏
- 船岡山（船岡，船岡山）
  - ・・・奉公衆など

### 3. 旧二条城跡（図2～4）

#### (1) 文献

ルイス・フロイスの『日本史』では、わずか70日で完成したこと、城の面積は三街を占め、石材の不足を補うために石仏や石塔をも利用したこと、建設作業には1万5千人～2万5千人が従事したこと、吊り上げ橋のある濠をもつこと、この濠には3箇所入口が設けられていたことなどが記されている。『言継卿記』、『信長公記』に共通する遺構を示す記述は、「勘解由小路室町武家之御堀」、「二条の古き御構え堀をひろげ」とされる足利義輝の御所に堀が存在したこと、また、義輝の御所や堀を利用して旧二条城が構えられていたことである。『言継卿記』の「石藏」「内之磊」「磊三重」という記述は、少なくとも同城が内郭と外郭の二重を持っていたこと、石垣があったことを示しており、『信長公記』の「方に石垣両面に高く築き上げ」という記述と一致する。特に『言継卿記』の「磊三重」という表現は、先の『日本史』の「三街を占める」に結びつく。さらに、「南巽之だし」、「東之だし」という表現から、南巽（東南）及び東側に出丸があったことがわかる。

足利義輝御所には、「御小座敷」、「御殿」、「慶壽院殿御殿（御對面所，御小座敷，御風呂，御藏，雜舎）」、「春日殿」と呼ばれる建物が存在しており、永禄8年（1565）5月19日に発生した松永久秀と三好三人衆による義輝暗殺とそれに続く焼亡でも、慶壽院殿御殿が焼け残ったこと、これらの施設が本國寺や相国寺に移築されたことが記されている。

足利義昭御所である旧二条城跡にあったとされる建

造物については、「新造御所」、「御新造常御所」、「南之矢藏」、「坤角三重櫓」、「西之門矢藏」、「南御門櫓」、「東之御門」の存在が示されており、御所、常御所、櫓、門があったことがわかる。特に門と一体となった櫓が西門、南門、東門に設けられていたことと、『日本史』に記された堀に3箇所の入口があったという記述との間に共通点が認められる。注目すべきは、坤（西南角）に三重櫓が存在していたことである。この三重櫓が内郭の西南角に存在したと考えると、時代は下がるが、寛永3年（1626）9月に行われた後水尾天皇の行幸に向けて改修された二条城の天守と同じ配置となる。

#### (2) 調査成果

前記のとおり、足利義昭の御所は、旧二条城は、13代将軍足利義輝の二条御所の濠を掘り上げて造ったもの（『信長公記』）と書かれており、『言継卿記』でも「先勘解由小路室町真如堂光源院御古城」と記述されている。それを証明するようにV字状の断面形態をもつ戦国時代の堀跡がみついている。この堀跡は、旧二条城跡の南内濠のすぐ南を東西に走る堀跡で、地下鉄烏丸線の発掘調査 No.25 の溝1と、その延長である No.54 の溝2である。残存規模は、幅2.4 m、深さ1.5 mを測るが南側壁の上半は攪乱されている[京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980 pp88～90、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981 pp96～100]。

また、義昭御所は、内郭と外郭の二重構造と考えられていたが、実際、4箇所の濠が発見され、それぞれ北外濠、北内濠、南内濠、南外濠に相当することがわかっている[京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980、1981、1982]。

北外濠（図1）は、中央部に石組みの暗渠があり、西側は幅約4 m、東側は幅約8.5 mの濠になっている。この暗渠部分は出入口と考えられている。しかし、『信長公記』、『言継卿記』とも北門の記述はなく、織田信長築城後に、義昭が自らの政治的基盤である「上京」との便を考え、増築した可能性がある。北内濠は、石材の不等沈下を防ぐために石垣の一番下に敷かれる胴木と呼ばれる木材の痕跡が見つかるとともに、フロイスの記述とおり、石仏や石塔が石材に使用されていた。濠の幅は約8.5 mあった。

南内濠（図3）は、最大幅26.9 m、東端でも19.4

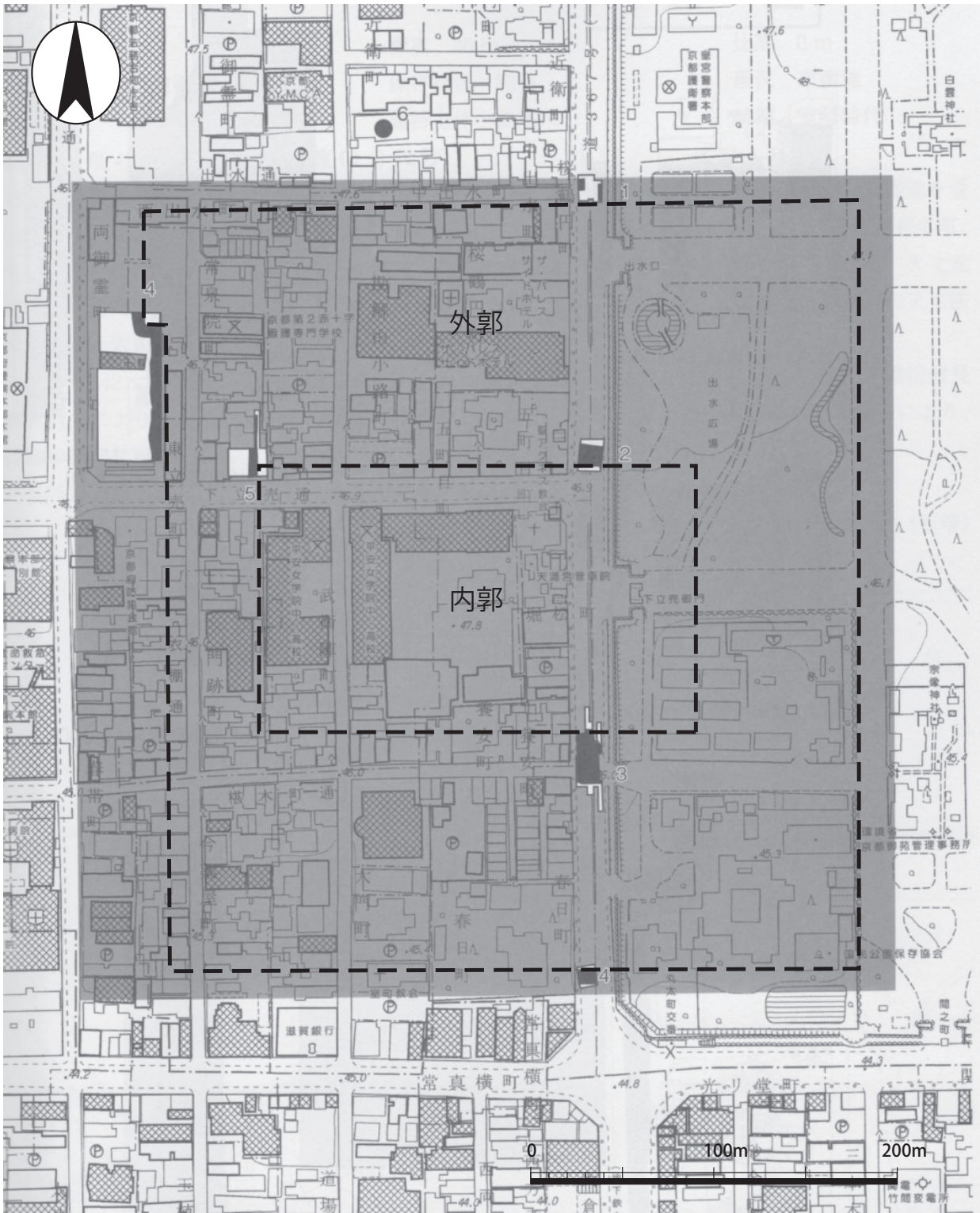


図2 旧二条城跡調査区位置図

mあり、最も巨大である。ここでも胴木が見つかるとともに、石仏や石塔が大量に石垣の石材として使用されていた。

南外濠は、幅約7.2 mある。ただし、他の濠と異な

り、濠の北面にしか石垣が認められなかった。

2012年に北内堀の西方、下立売通の北側に面した敷地で、南北方向の濠21が検出された。この敷地は、現在の南北道路である衣棚通と室町通の間に位置す

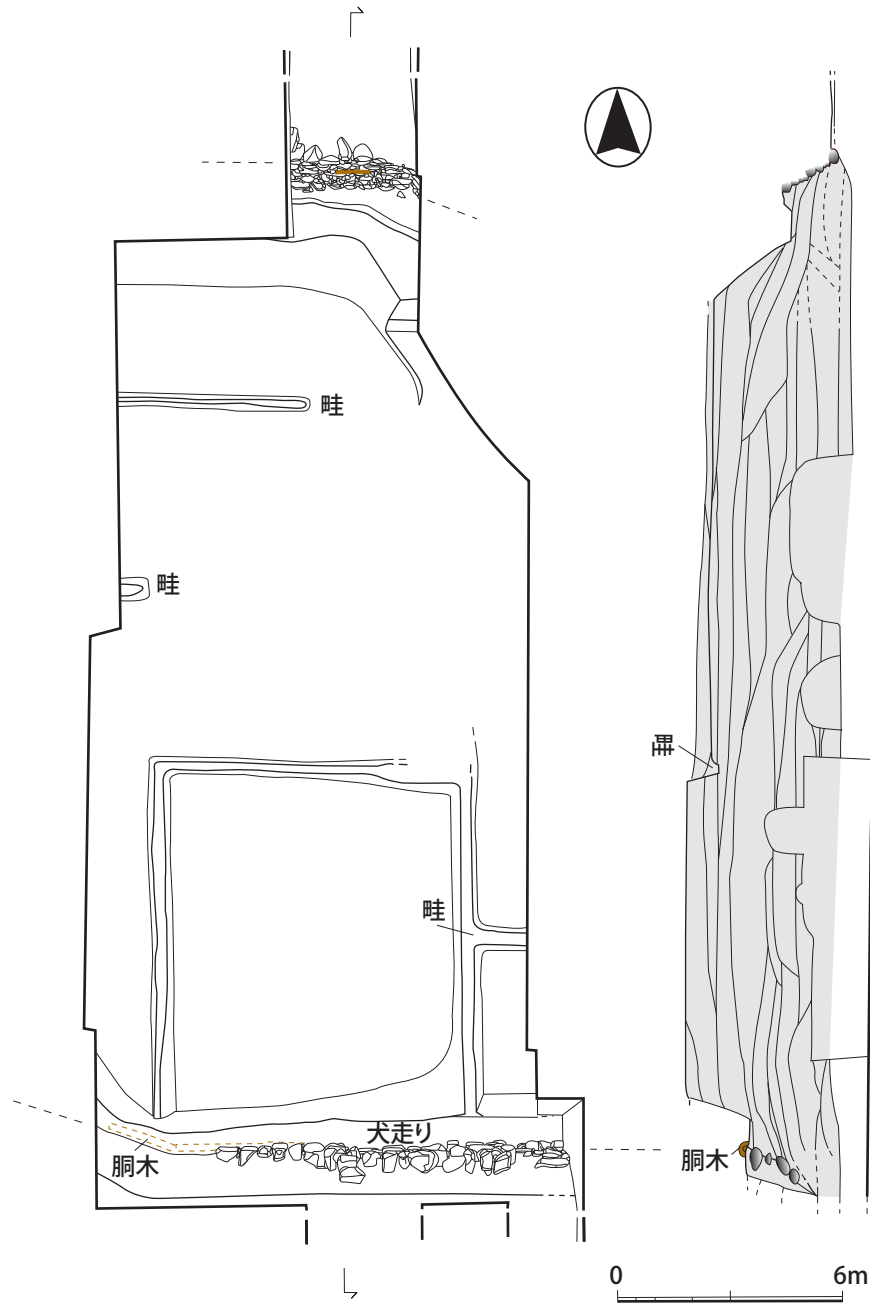


図3 旧二条濠跡榎木町濠（南内濠）(S=1/100)

る。検出された濠の幅は4.7～4.9 mあり、濠の東側には幅1.8～2.0 mの犬走りをもっている。深さは2.2～2.4 mを測り、底部から0.8～1.0 m付近まで水が滞水していた痕跡が残っていた。石垣はないものの、京都X期新（16世紀第3四半期頃）の土師器が出土しており、旧二条城跡の時期と考えると良さそうである。この濠は内郭の西濠ではないかと考えられている[上村 2012]。

この素掘りの濠跡の検出により、1992年～1993

年の発掘調査で検出された屈曲部をもつ濠の存在が注目されることになった[中居 2014a]。上京区両御霊町の京都府警察110番指令センター新築工事に伴う調査で検出された素掘りの堀Aと呼ばれる遺構で、途中でクランク状に屈曲し、幅約6～7 m、深さ約2.2 mを測る。堀からは金箔瓦の他、多量の石仏が出土している。当時の担当者は旧二条城跡の遺構とは考えなかったものの[森島 1994]、2012年に検出した濠跡の（犬走りを含めた）幅や深さ、埋没時期と共

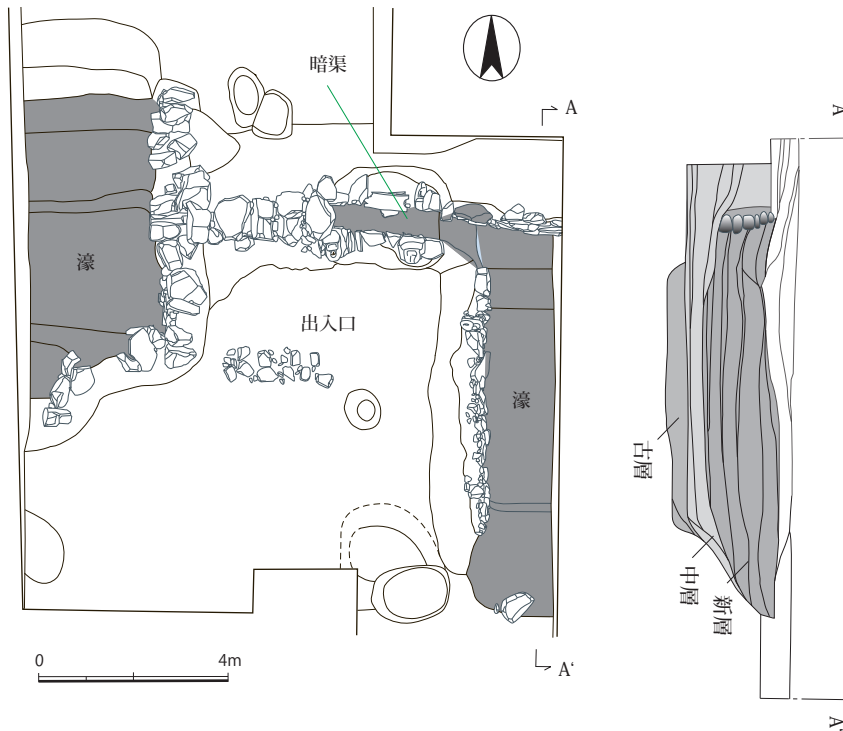


図4 旧二条城 No.52 濠（北外濠）

通項があり、外郭西外濠の可能性がでてきた[中居 2014a]。文献の記載どおり、石垣を伴う東西方向の4条の濠跡が検出されたことから、旧二条城（義昭御所）は内郭と外郭の二重構造であり、南北が平安京の条坊制のほぼ3町分に相当していたことが確定した。一方、東西両端についてはまだ確定していない。フロイスのいう「三街」の意味は、平安京の条坊制の単位である三町分を示すのか、もしくは三町四方なのか、別の単位を示すのかよくわかっていない。ここでは、北外濠の南端から南外濠の北端までの約380mが、平安京の条坊単位である町3個分と大路1条、小路1条を含み込んだ数値402mに近似しており、南北方向については三町分占有していたと考えた。東西に関しては、『言継卿記』に「武家之御舊跡勘解由小路烏丸室町間」とあり、烏丸小路と室町小路の間にあると考えれば、東西幅一町となるが、これはあくまで足利義輝期の記述であり、内郭と外郭の二重構造であることを考え合わせ、二町以上の東西幅があってもおかしくはないと考えられる。1992～1993年の発掘調査と、2012年の発掘調査で検出された南北方向の濠跡がそれぞれ内郭西濠、外郭西濠であるとすれば、三町四方の可能性が高まったと考えられる（図2）。

#### 4. 本國寺城跡（図5）

本國寺は、貞和元年（1345）に京へ移転してきた法華宗の寺院で、堀川小路西、六条坊門小路南、大宮大路東、七条大路北の12町にも及ぶ広大な寺地を誇った。

比叡山延暦寺と法華宗との軋轢から天文5年（1536）7月22日から28日に天文法華の乱と呼ばれる一大戦闘が行われる。延暦寺の宗徒は近江（滋賀県）南半の戦国大名六角氏を味方につけ、上京・下京にあった法華宗の寺院を次々と落としていった。最後は、当時唯一下京の外にあった本國寺へ法華宗の残存勢力が集結するものの、7月28日には衆寡敵せず六角軍に攻め落とされている。

本國寺をはじめとする法華宗の寺院は、天文11年（1542）帰洛の勅許が出ると再興にとりかかり、天文16年（1547）再建されている。

その後、織田信長が將軍足利義昭のために旧二条城を造るきっかけとなる六条合戦が永禄12年（1569）1月4日に発生する。織田信長のいない時期をねらって三好三人集や斎藤龍興らによる攻撃が行われた。幸い、明智光秀などの防戦により落城は免れたものの、建物の一部は旧二条城へ運ばれてしまい、天正19年（1591）には本願寺建立（西本願寺）に際して寺地を

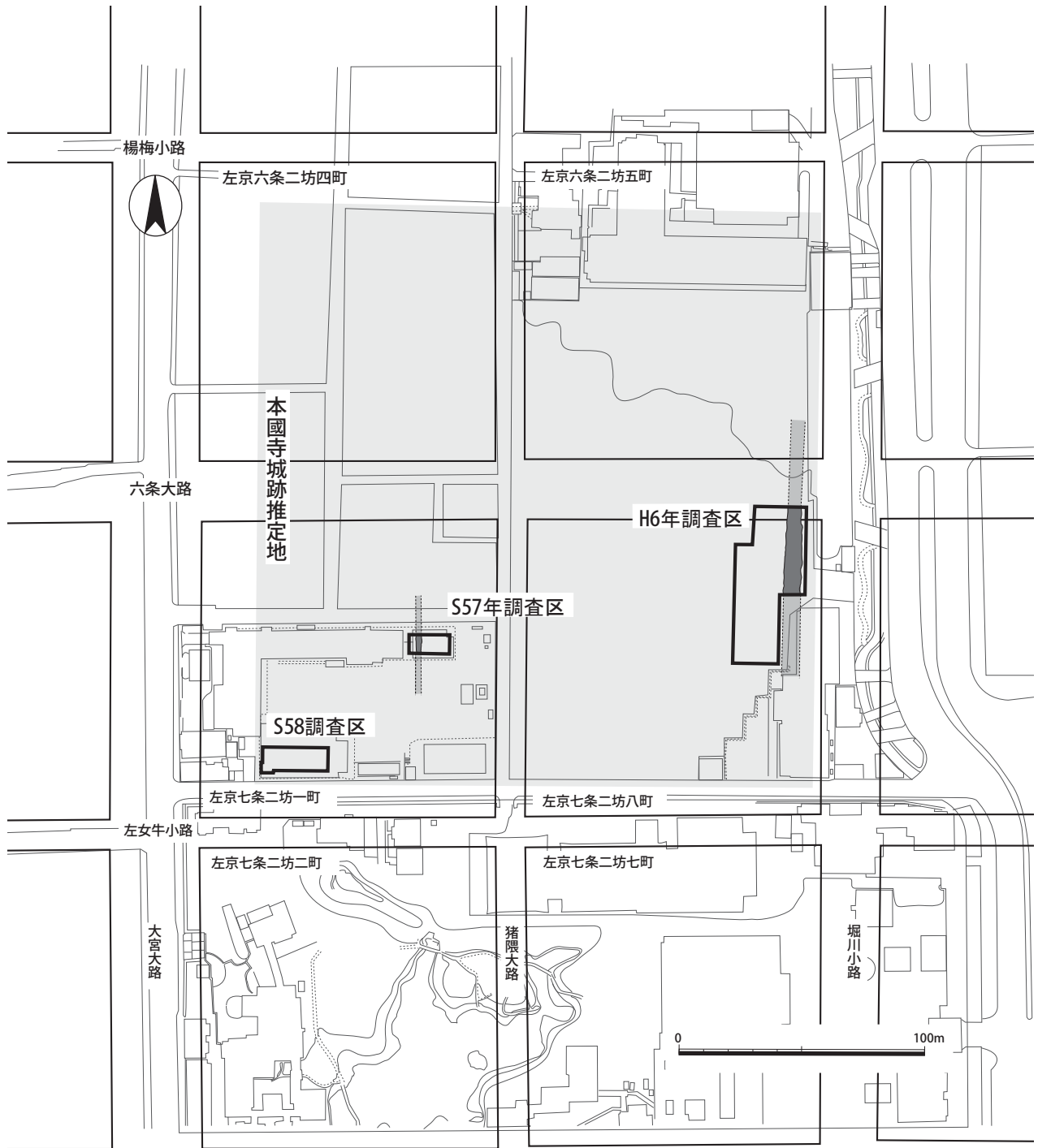


図5 本國寺城調査区位置図 (S=1/2,500)

削られている。

(1) 文献

『言継卿記』には、武家(足利義昭)が永禄11年(1568)10月14日に芥川より六條本國寺に御座所を移してすぐ、永禄12年(1569)1月5日に三好三人衆たちの攻撃を受けたこと、この攻撃後、山科言

継が度々六條本國寺の御所を訪問したことが記されている。ただし、山科言継は、旧二条城の記述とは異なり、六條本國寺の施設について記述していない。同様に、『信長公記』でも、永禄11年10月14日に、「芥川より公方様御帰洛、六條本國寺に御座をなさる。」とあるが、施設に関する記載がない。六條合戦については、『言継卿記』が永禄12年1月5日であるのに対し、

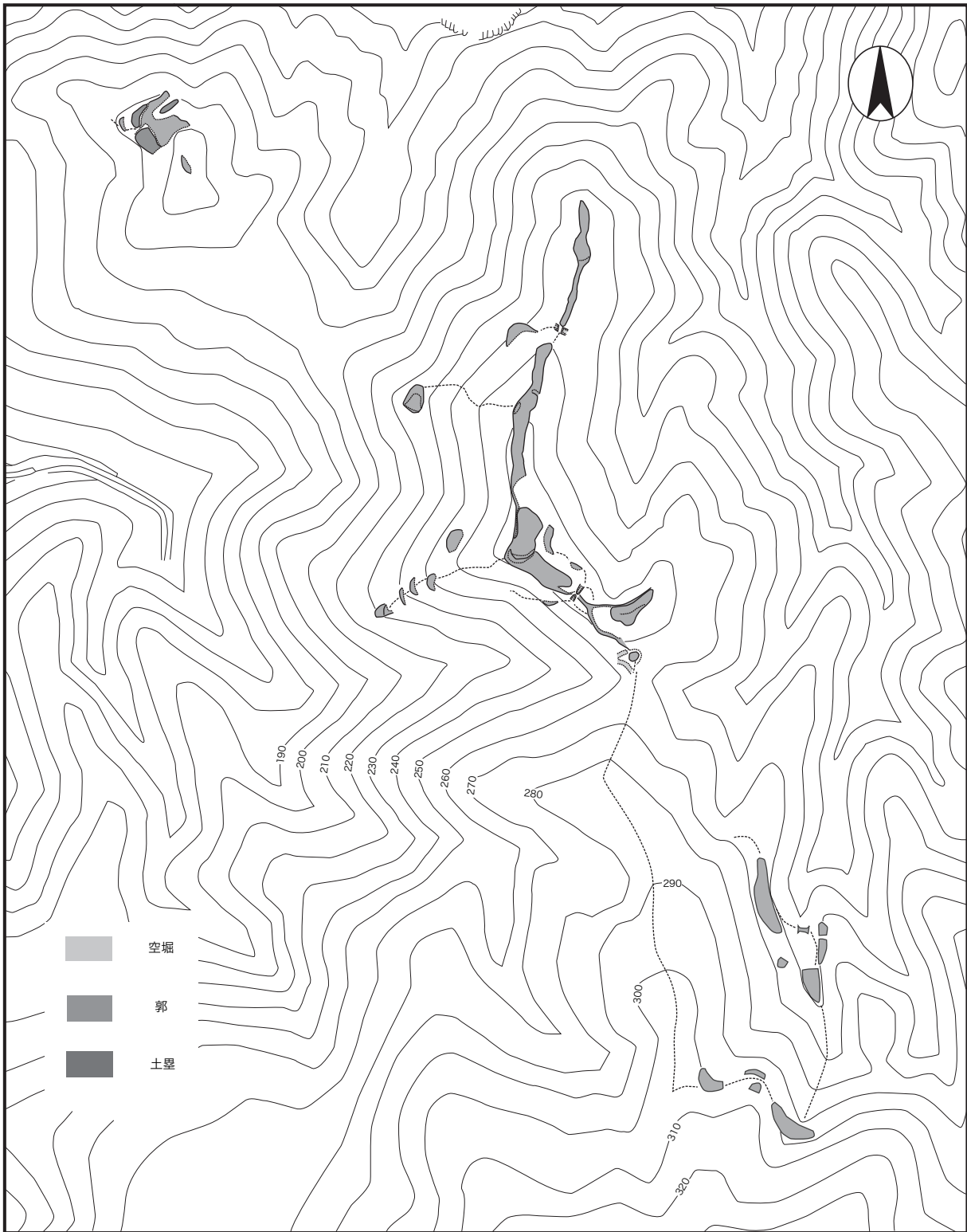


図6 中尾城跡 total.plan

『信長公記』は同年1月4日となり、1日早い記述となっている。また、『信長公記』は三好三人衆に加え、斎藤龍興、長井隼人、薬師寺九郎左衛門が攻め手に加わっていることが記述されているほか、足利義昭方と

して「細川典厩、織田左近、野村越中、赤座七郎右衛門、赤座六助、津田左馬丞、渡辺勝左衛門、坂井与右衛門、明智十兵衛（光秀）、森弥五八、内藤備中、山県源内、宇野や七」等が細かく記述されている。



しかし、両文献とも本國寺城跡の構造や規模に迫る記述はなく、文献から、城の詳細を復元をすることは困難である。

## (2) 調査成果

平成6年の発掘調査により、南北34mにわたって、幅約6m、深さ2mという大規模な濠跡が発見された。この濠跡は、まさに天文法華の乱の起こった16世紀前半に埋められたことがわかっている。ただし、堀の一部については、江戸時代前期まで残り続けており、六条合戦の時にもこの堀は使われていた可能性も示唆されている。検出されたこの堀は、本國寺の東端に相当している。

また、境内地内部にも規模は小さいものの幅約2.5mの南北方向の堀が見つかっており、複雑な防御の施されていたことがわかっている。

## 5. 中尾城跡（東山武家之御城，東山武家御城，東山御城，御城）(図6)

### (1) 文献

『信長公記』には明瞭にわかる記載はなく、『言継卿記』と築城者である足利義晴に関する記録「萬松院殿穴太記」を比較することにする。

A『言継卿記』天文19年(1550)10月20日条の記載から、同11月23日条の三好配下による破城行為までは、「東山武家御城」「御城」と記された城は、足利義輝の父、12代将軍足利義晴の築城した中尾城跡のことであると考えられる。しかし、天文21年(1552)11月17日以降の記述では「東山御城」「御城」「東山武家御城」という表現に加え、「東山靈山御城」「靈山」という記述が認められるようになる。少なくとも靈山と記載のあるものは、中尾城ではなく、靈山城が武家御城として機能するようになったことを示している。

B「萬松院殿穴太記」義晴の事跡を記したこの文章から、中尾城には、つづら折れの登城路があり、尾根上に3条の堀切や、二重壁の間に石を詰め込んだ鉄砲用心の壁が存在していたことがわかる。さらに、四方に水を湛えた堀が存在していたことも記載されている。

### (2) 調査成果

中尾城については、京都大学考古学研究会が2001

年度に主要部分の調査を行い[竹中康将他 2001]、京都市文化財保護課が2006年度に南の谷部分に展開する郭群の踏査を行っている。

主要部分は標高270mの尾根上に平坦地(郭)を18箇所、堀切を3条、土塁を2箇所認めている。主郭は幅34m、奥行き13mの規模を有する。その他の郭も幅が10m～85m、奥行きが3m～33mある。

南の谷部分に展開する郭群は、幅5～40m、奥行き3～10mの郭が9箇所あり、土橋も1箇所確認している。

以上から、多数の兵力を滞在させる郭があり、尾根上に堀切が存在することが判明した。しかし、文献にある水堀は山城への設置は困難であり、記述の信憑性に疑問が残る。

## 6. おわりに

以上、3つの城郭をサンプルとして文献と発掘・踏査データとの照合を試みたが、建物の位置だけでなく、その存在を現地調査によって確認することは困難である場合が多い。これは各城郭の破却時に自焼(自ら火を付けること)や焼き討ち行為が行われたり、移築等がなされるためであり、礎石等も含めて移動されることを示している。旧二条城の石垣石までもが破却後に随意に持ち去られていることを見ても、比較的残存しやすい堀に伴う遺構でさえもオリジナルの形をとどめていないことを示している。しかも文献は城中にあった全ての施設並びにその規模を記しているわけではなく、記録者(日記の作成者)や築城主体、敵方等の行為に付随するものしか記述されていないこともわかる。

文献に記載されていないものの、発掘調査により検出された遺構に、旧二条城北外濠の食い違い虎口、石垣をもたない南北濠がある。また、中尾城は地形的に見て、水を湛えた濠は存在しないと考えられる。

しかし、検出は困難であるものの、文献で表現される建築物等の施設の有無は、発掘調査で検出された遺構の解釈の手助けになるだけでなく、城の存続期間や築城主体の具体化には欠かせないものであることが今回の比較からもわかった。

また、ルイス・フロイス、山科言継は、同一地点に築城された二つの城郭(足利義輝の御所と、織田信長の築城した旧二条城跡)を目撃し、記述している。両

者とも、織田信長の築城した旧二条城跡について、濠(堀)はもちろんのこと、石垣や櫓、橋、門などの多様な防御施設を記している。これは、前代までの城と異なる画期的なものと認識されたが故に、詳細に記述されたとも考えることが可能である。

そして旧二条城は、尾州(尾張)、濃州(美濃)、勢州(伊勢)、江州(近江)、伊賀、若州(若狭)、城州(山城)、丹州(丹波・丹後)、攝州(攝津)、河州(河内)、和州(大和)、泉州(和泉)、播州(播磨)の武士が上洛し、普請を担当しており、後の天下普請の先駆けともなっている。わざわざこのような記述をすることも、織田信長の築城行為が前代と全く異なることを示していると考えられる。このようなことは文献からのアプローチが最も得意とするものである。

我々考古学を研究する者は、戦国時代から織豊期に関する遺構を集成し、分類作業を行い、文献だけではわからない築城という土木行為、城郭構造を明らかにする必要がある。

#### 参考文献

石崎善久

2014 「本圀寺城跡」『京都府中世城館跡調査報告書—山城編—』第3冊(京都府教育委員会 pp271～273)。

馬瀬智光

2004 「洛中・洛外の城館について—築城主体の類型化から—」『第12回 京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集—京都の城・構・館—』(京都府埋蔵文化財研究会 pp40～56)。

2006 『京の城—洛中洛外の城郭—』(『京都市文化財ボックス』第20集, 京都市)。

2014 「都市部における城館調査」『城郭研究の奇跡と展望Ⅲ』(城郭談話会 pp16～17)。

太田牛一(桑田忠親 校註)

2004 『信長公記』(新人物往来社)。

上村憲章

2012 『平安京左京一条三坊六町・旧二条城跡』(古代文化調査会)。

京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会

1980 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ 1974・75年度』(京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会)。

1981 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ 1976年度』(京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会)。

1982 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ 1976年度』(京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会) 左僕射(兼冬)。

1979 「萬松院殿穴太記」『群書類従』巻第五十二(続群書類従完成会)。

竹中康将他

2001 「中尾城跡調査報告」『第50とれんち』(京都大学考古学研究会)。

中居和志

2014a 「旧二条城跡」『京都府中世城館跡調査報告書—山城編—』第3冊(京都府教育委員会 pp222～224)。

2014b 「中尾城跡」『京都府中世城館跡調査報告書—山城編—』第3冊(京都府教育委員会 pp261～263)。

森島康雄

1994 「平安京跡・旧二条城跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第59冊(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター pp51～96)。

山下正男

1986 『京都市内およびその近辺の中世城郭—復元図と関連資料—』(『京都大学人文科学研究所調査報告』第35号, 京都大学人文科学研究所)。

山科言継

1997・1998 『言継卿記』巻1～巻6(続群書類従完成会)。

文献史料 1-1 <旧二条城跡> 『言継卿記』 『信長公記』

文献名	『言継卿記』	『信長公記』
築城開始	永禄2年8月12日(義輝)	
	永禄12年1月27日(義昭)	永禄12年2月27日
城郭名(義輝期)	武家御所	
	武家之御舊跡	
城郭名(義昭期)	先勘解由小路室町真如堂光源院御古城	公方様御構え
	武家御城	御構え
	御城	
	勘解由小路室町武家之御堀	
	武家御旧跡	
	公方之御城	
堀・石垣(義輝期)	御堀	
堀・石垣(義昭期)	石藏(石垣)	二条の古き御構え堀をひろげ
	西方石藏, 石藏西面・南面, 西南石藏	方に石垣両面に高く築き上げ
	南之岸	
	内之磊(内郭の石垣), 磊三重, 南翼之だしの磊, 磊之内, 東之磊, 東之だし ※だし: 出城, 出丸	
	公方之御城之二之堀	
建物(義輝期)	御小座敷	
	御殿	
	慶壽院殿御殿(御對面所, 御小座敷, 御風呂, 御藏, 雑舎)	
	春日殿	
建物(義昭期)	新造御所	御殿
	御新造常御所	
	南御門櫓, 南之御門	
	南之矢藏	
	坤角三重櫓	
	西之門矢藏	
	東之御門	
	南之楯	

文献史料 1-2 <旧二条城跡> 『言継卿記』 『信長公記』

和暦	西暦	日日	城郭名	出来事
永禄2年	1559	7月20日	武家御所	今夕、大覚寺殿より武家御所へ御返しがあった。
永禄2年	1559	8月12日	武家御作事	武家御作事を見舞に参ったところ、上野民部大輔以下の奉公衆、同朋等10人ばかりがいた。暫く見物した。
永禄2年	1559	10月23日	武家之御堀	武家之御堀の普請を相除様子。
永禄2年	1559	10月24日	御堀	甲斐之守久宗が本堀の事態に來た。昨日の様に申し含めた。
永禄2年	1559	10月26日	武家御小座敷立柱上棟	武家御古座敷では立柱が上棟された。澤路隼人佑が取り次いだ。
永禄2年	1559	11月3日	武家御所	武家御所に使いを出す。
永禄3年	1560	2月24日	武家御殿御堀、御堀奉行、御殿、慶壽院殿御殿、春日局	武家御殿御堀等を見舞申し上げた。奉公衆の上野民部大輔橋下、松田對馬守が御堀奉行、御殿は沼田上野介、結城七郎が奉行、慶壽院殿御殿、春日局等も見舞った。
永禄7年	1564	4月24日	武家之御馬場	武家之御馬場において、來月賀茂へ出ない予定の馬ばかり十四五疋に奉公衆が乗った。
永禄7年	1564	10月27日	武家裏御門	武家裏御門にて細川宮内少輔の中間2人が喧嘩。
永禄8年	1565	5月19日	武家御所、御殿、春日殿、慶壽院殿御殿	辰の刻に三好の人数、松永右衛門佐等一万人ばかりが突然武家御所へ亂入し取りまいた。戦は暫く続き、奉公衆の多くが討死した。大樹は午の初點に御生害(自害)した。阿波の武家が上洛するからとも言われる。御殿は悉く放火され、春日殿も焼けた。慶壽院殿御殿が焼け残ったという。

文献史料 1-3 〈旧二条城跡〉『言継卿記』『信長公記』

和暦	西暦	日日	城郭名	出来事
永禄8年	1565	7月9日	武家之御舊跡、慶壽院殿御殿、御對面所、御小座敷、御茶湯所、御風呂、號慶壽院云々御藏、雜舎	武家之御舊跡、上野、杉原の所などを見物した。焼け残った慶壽院殿御殿は方々に引き立てられていった。御對面所は相國寺廣徳へ引き取られ、光源院の建てたと言われる御小座敷や御茶湯所、御風呂等は嵯峨の鹿王院へ、慶壽院と言われる御藏や雜舎等は本國寺へ引き取られた。
永禄9年	1566	12月28日	櫻之馬場武家之御堀	櫻之馬場武家之御堀の様子を見物した。
永禄10年	1567	5月17日	武家之御舊跡勘解由小路烏丸室町間	一昨日より真如堂の千部経があった。場所は、武家之御舊跡、勘解由小路烏丸と室町の間である。
永禄12年	1569	1月27日	先勘解由小路室町真如堂光源院御古城	先勘解由小路室町真如堂にある光源院御古城を再興することについて、織田彈正忠信長が普請を奉行することになった。
永禄12年	1569	2月2日	勘解由小路室町真如堂、如元武家御城、石蔵	勘解由小路室町真如堂で、武家御城を元のように普請することのことである。今日より石蔵(石垣)を積み出すとのこと。尾州、濃州、勢州、江州、伊賀、若州、城州、丹州、攝州、河州、和州、泉州、播州少々上洛し、石を持ち、まず西ノ方から取りかかった。
永禄12年	1569	2月7日	武家御城、西方石蔵	午時に武家御城の普請について、織田彈正忠を見舞った。西方石蔵(石垣)は大概出来、今少し残すのみである。
永禄12年	1569	2月9日	武家御城之南之岸	武家御城の南の岸が崩れ、人夫が七、八人亡くなったとのこと。日々数千人が普請している。
永禄12年	1569	2月13日	城之普請	武家は本國寺より御成し、城之普請を御一覽し、その後、再び本國寺へ帰還した。
永禄12年	1569	2月14日	武家御城、石蔵西面、南面	朝食後、武家御城の普請見舞に織田彈正忠を訪ねた。石蔵(石垣)の西面は悉く出来、南面も半分以上出来ていた。
永禄12年	1569	2月19日	御城、西南石蔵	朝食後、御城の普請見舞に織田彈正忠を訪ねた。西南の石蔵(石垣)は大体完成していた。
永禄12年	1569	2月20日	御城	朝食後、武家のいる本國寺を訪ねた。まず御城へ立寄、織田彈正忠に礼を申し上げた。
永禄12年	1569	3月3日	御堀之内	細川右馬頭の庭の藤戸石を織田彈正忠は三、四千人を使って引き、笛、鼓にて囃した。勘解由小路室町まで引いたが、日暮の間に御堀之内に入れることはできなかった。
永禄12年	1569	3月4日	堀之内	昨日の石を堀之内へ引き入れた。
永禄12年	1569	3月7日	内之磊	内之磊(石垣)は今日悉く完成した。驚くべきことである。十一箇国の衆が普請した。
永禄12年	1569	3月11日	南御門櫓	南御門は昨日櫓が建てられた。三好左京大夫が大石を引いたので、織田彈正忠が見学した。
永禄12年	1569	3月28日	西之門矢蔵、御庭之石	西之門矢蔵が据えられ、御庭之石も大概据付けられた。三、四百の石が使われている。
永禄12年	1569	4月2日	磊三重、南巽之だし、東之だし、近衛之敷地	普請見物をした。磊三重は悉く出来上がっており、又南巽(たつみ：南東)之だしの磊も完成し、東之だしを只今造っている。東之だしの方にある近衛の敷地は悉く奉公衆の屋敷になった。近衛は不運である。
永禄12年	1569	4月13日	磊之内	磊(石垣)之内側へ、明日武家が移動することのこと。
永禄12年	1569	4月14日	勘解由小路室町	巳刻に武家(足利義昭)は勘解由小路室町に座を移した。
永禄12年	1569	4月21日	御門、東之磊	織田彈正忠の所へ罷向ったところ、春日室町で行合ひ、暇乞いを申したが、武家へ参るので同道した。則對面となり、酒杯を受け、御太刀と御馬を進上した。武家は織田彈正忠を御門の外迄送り、東之磊(石垣)に御成になり、粟田口に入るまで遠見をされた。
永禄12年	1569	閏5月3日	南之楯	武家に参上し、南之楯において武家と合う。四方を御廻覧した。
永禄12年	1569	閏5月21日	南之矢蔵	武家に参上し、南之矢蔵において納涼した。
永禄12年	1569	7月1日	新造御所	午時に武家に参上した。御供衆の一色播磨守、同式部少輔、伊勢三郎等と、公家は予(山科言継)だけであった。新造御所で武家と對面したが、その際の申次ぎは飯川肥後守であった。

文献史料1-4 <旧二条城跡>『言継卿記』『信長公記』

和暦	西暦	日日	城郭名	出来事
永禄13年	1570	3月17日	武家櫻御馬場	武家櫻御馬場において、三川(三河)の徳川の内衆が馬に乗っているのを、武家が御覧になり、予(山科言継)も祇候した。
永禄13年	1570	7月22日	坤角三重櫓	久しぶりに武家に参上した山科言継は、坤(ひつじさる:西南の方角)角にある三重櫓を見、御成之間で暫く祇候(貴人の側で使える)した。
永禄13年	1570	9月21日	御城	明智十兵衛、村井民部小輔、柴田修理亮等が上洛し、御城の城番をする。
元亀2年	1571	1月25日	御新造常御所	山科言継が御新造常御所で武家(足利義昭)と対面する。
元亀2年	1571	7月25日	南之櫓	山科言継が武家を訪れた際、武家(足利義昭)が南之櫓に御成する。
元亀2年	1571	7月29日	御矢蔵、常御所	山科言継ら公家衆が武家を訪れ、御矢蔵で上京衆の踊を見物する。その後、常御所で盃を交わしている。
天正4年	1576	5月9日	勘解由小路室町武家之御堀	サイカノ孫一首昨日上洛したとのこと、早旦勘解由小路室町武家之御堀之端に是を懸けた。
天正4年	1576	9月18日	武家御旧跡御庭、石垣之石	葉室に同行し、村井長門守邸に行った帰路、武家御旧跡の御庭を見たいとのことであったので同道し見学した。予(山科言継)は今朝之を見たところ、石垣之石などが方々雑人によって取り去られていた。
天正4年	1576	9月24日	武家御城之内桃木、南之御門、東之御門	武家御城之内に植えられた桃の木20本を掘り出し、此のほうの土居に植えた。昨日南之御門を、本日は東之御門を崩して江州安土へ引いていった。石は方々に取り去られた。
天正4年	1576	10月25日	公方之御城之二之堀	村井長門守の所へ行った帰り、公方之御城之二之堀が上京衆に申し付けられて埋められているのを見学した。

文献史料2 <本國寺城跡>『言継卿記』

和暦	西暦	日日	城郭名	出来事
永禄11年	1568	10月14日	六條本國寺	今日芥川より武家が御上洛し、六條本國寺へ移り、御座となる。
永禄11年	1568	10月15日	本國寺	聖護院新門主等と山科言継が同道し、本國寺へ参上する。
永禄12年	1569	1月5日	本國寺	三好日向守、同下野入道釣竿、石成主税助以下、今日ことごとく本國寺を取り巻き攻め込んだ。午時に合戦となり、寺の外が焼かれ、中堂寺、不動堂、竹田等が放火された。武家の御足輕衆以下20人余りが討死し、責めての衆は死人手負いが数多いとのこと。
永禄12年	1569	1月27日	六條本國寺	次いで六條本國寺へ参上した。
永禄12年	1569	2月13日	本國寺	武家は本國寺より御成し、城之普請を御一覽し、その後、再び本國寺へ帰還した。
永禄12年	1569	2月14日	本國寺	本國寺の武家を見舞に行ったが、武家が咳気があり、合うことはできなかった。
永禄12年	1569	2月20日	本國寺	朝食後、武家のいる本國寺を訪ねた。まず御城へ立寄り、織田彈正忠に礼を申し上げた。
永禄12年	1569	2月26日	本國寺	朝食後、すぐに武家のいる本國寺を訪ねた。
永禄12年	1569	3月1日	本國寺	山科言継らは武家を訪ねて次いで本國寺へ向かった。

文献史料 3-1 〈中尾城跡〉『言継卿記』

和暦	西暦	日日	城郭名	出来事
永禄 11 年	1568	10 月 14 日	六條本國寺	今日芥川より武家が御上洛し、六條本國寺へ移り、御座となる。
永禄 1 1 年	1568	10 月 15 日	本國寺	聖護院新門主等と山科言継が同道し、本國寺へ参上する。
永禄 12 年	1569	1 月 5 日	本國寺	三好日向守、同下野入道釣竿、石成主税助以下、今日ことごとく本國寺を取り巻き攻め込んだ。午時に合戦となり、寺の外が焼かれ、中堂寺、不動堂、竹田等が放火された。武家の御足輕衆以下 20 人余りが討死し、責めての衆は死人手負いが数多いたとのこと。
永禄 12 年	1569	1 月 27 日	六條本國寺	次いで六條本國寺へ参上した。
永禄 12 年	1569	2 月 13 日	本國寺	武家は本國寺より御成し、城之普請を御一覽し、その後、再び本國寺へ帰還した。
永禄 12 年	1569	2 月 14 日	本國寺	本國寺の武家を見舞に行ったが、武家が咳気があり、合うことはできなかった。
永禄 12 年	1569	2 月 20 日	本國寺	朝食後、武家のいる本國寺を訪ねた。まず御城へ立寄、織田彈正忠に礼を申し上げた。
永禄 12 年	1569	2 月 26 日	本國寺	朝食後、すぐに武家のいる本國寺を訪ねた。
永禄 12 年	1569	3 月 1 日	本國寺	山科言継らは武家を訪ねて次いで本國寺へ向かった。

文献史料 3-2 〈中尾城跡〉「萬松院殿穴太記」

和暦	西暦	日日	城郭名	出来事
天文 18 年	1549	10 月 28 日	大たけ中尾	其年の十月廿八日甲子の日。先慈照寺の大たけ中尾という山にて鍬そめをぞさせられける。掛りけれど。きりきりと普請杯もなかりければ。もとより御進發の事は沙汰にも及侍られず。
天文 19 年	1550	2 月 16 日	御城山	猶御城山の事のみ御心にかけさせ給ひて。右京兆晴元。彈正少弼定頼朝臣に御談合有て。二月十六日乙亥に又御普請始ありて。ほどなうつくり出せり。誠に百万騎の勢にて攻る共。一夫いかつて關城に向ひなば。容易落難し。山高して一片の白雲嶺を埋み。谷深ふして万仞の岩路を遮り。つゞら折なる道を廻りて登る事七八丁。南は如意が嶽に續きたり。尾さきをば三重に堀切て。二十に壁を付て。其間に石を入たり。是は鐵炮の用心也。四方には池を掘て水をたへたれば。昆明池の春の水に夕日を浸して淵淪たるに異ならず。攝丹を目の下に見おろして。寔に名城共云べし。
天文 19 年	1550	3 月 26 日	城中	御入城は來廿七日と被レ定て。城中の衆も御迎に参しに。廿六日に伊丹大和守雅興。俄に心替りの由注進有しかば。晴元又御延引の事を頻にとめ被レ申しかば。力なくとゞませ給ふ。諸奉公の輩をば皆城へかへされけるとて。城中の制法二十ヶ條計記せられて。城中を堅固にふまへ。御出張を待べしと直に被レ仰しぞ。
天文 19 年	1550	4 月 27 日 比	城	在城の人々をめせとて。上野民部大輔信孝。伊勢守貞孝。三淵掃部頭晴員。館川山城守信堅。急ぎ馳参りけり。大館左衛門佐晴元。攝津守元遠朝臣は在城の人ならねど。召に應じて御前に参しかば。
天文 19 年	1550	5 月 21 日	城山	廿一日には御葬りの事有べしとて。開闢松田對馬守盛秀奉行して。諸郷諸村の人足を催して。東山の麓慈照寺の中に葬場の普請を致す。代々の御葬禮は北山等持院にて有しに。今は亂れたる世中といひ。又この日來入城の御事のみ御心に被レ掛し御勢ひの末なればとて。城山の麓にて葬禮し奉る。廿一日の寅の刻に先龕を唐人の間に奉レ置て。嵯峨の間にて御佛事ある。喪主は等持院の住持たるべきに。當住出世の人なしとて。俄相国寺法霖長老を請ぜられたり。梅升龕前堂の左に立。